

※一人だけ……また同僚関係のことを覚えてくれる人に出逢えていない状態（私教は悪い無し）



※料理屋敷が通いかけでくる。この凡天の世間は常に災難によって悩まされている。





あー真ん中に
白い道があるわ
…これを通れば…



今…なんだか
騙くて
たよりない道ね…



魔力の白濁… 水火の魔物は常に異しく、

どうしようも
解るわけにも
いかないし

どうしてだよ
ヤバめ
なのが
通いついて
来るし…

通いついて
来るし…

③ 通いついて
来るし…

④ 通いついて
来るし…



この道を通むと
水や火の中に
落ちこちそう…



魔力の魔物の道は細くたよりない



阿弥陀様に導く...

阿弥陀様のお経に読まれた本願のお恵を聞く（自分をみつめるのではなく本願を開け）

宗師の白蓮 …… 阿修羅様と通じられ、阿修羅のあるまじで阿修羅様のお浄土へ





③他の両敵からの妨害 : ①敵の両敵(通明や神だめみなど)

②自力修行の両敵(理論も実践も強い)

「何しても安心がないこの世界、浄土は手だけでは安心できず、助ける、そしてお浄土は全てが安心の世界」



近江源和天皇様のお言葉

「因幡寺には決心願せんしんりよう」という引換証書の裏がありました。

戦争従軍や引換者の境遇を気にかけておられた昭和天皇は、佐賀県で最初の御巡幸にここに望まれたのでした。

やがて陛下は引き込まれるようにして、陛下を待ち申している三人の直ん中の女の子に話しかけられました。

見ると、女の子が手にしていたのは役牌でした。

「お父さん、お母さん？」

陛下は話しかけます。

役牌は二つでした。

「はい、これが父と母です」と女の子は答えます。

「どうですか？」

「父は、ソコ國境で名譽の戦死を遂げました。

母は、引換の途中で病のため亡くなりました」

「お淋しい？」

女の子は首を横に振って口元を引き締めました。

「いいえ、淋しくありません。私は仏さまの子とでもですから」

陛下は少し驚いて女の子の目を見つめたが、女の子はひるまずに続けた。

「仏さまの子は父にも母にも、お浄土でもう一度会えるんです。だから父や母に会いたくなったら、私は仏さまに手を合わせます」。

そして、父と母の名前を呼ぶんです。すると父も母も私のそばにやってくる、私をそつと抱いてくれるんです。私は淋しくありません。私は、仏の子です」

陛下は女の子をしばらく見つめたあと、襦袢に入りり右手の轡子を左手に持ち替え、空けた右手で女の子の頭をゆつくり時間をかけて撫でつつ、なほも話しかけました。

「仏の子どもは不幸せね、これから立派に育ってくださいな」

と語りなり、襦袢の上に太鼓の図が一つ二つ爭れ落ち・・・ました」

「因幡寺いんつうに仕職の御草履（しらべかんが）氏の著書「天皇さまが泣いてこぼった」より」

（以上まさか「戦争を語り聴く無い・かぞえま」より）